

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大森弘子

題 目 子育て支援を促進する保育者の専門性と力量形成

子育て支援は、2001(平成13)年の児童福祉法一部改正をもって制度上最初に示され、それに伴い、保育士の業務として「保護者に対する保育の指導」が規定された。しかしながら現在のところ、保護者に対する保育業務の原理や技術は、十分に構造化されておらず、保育者(幼稚園教諭、保育所保育士、及び認定こども園保育教諭)は、それぞれが持つ経験を頼りに多様な子育て支援の実践を試みている。また、子育て支援に関わる実証的かつ実践的な保育者支援プログラムは、ほとんど見当たらない。そのため保育者には、広範かつ多様な専門性と力量が求められ、保護者支援の難しさを感じているのが現状である。そこで本論文では、支援の対象となる保護者の「育児不安」及び「子育て支援」に関する先行研究の整理に基づき、保護者が示す保育者への役割期待を明らかにする。それらを踏まえ、保育者への役割期待と支援の整合性が高い支援プログラムを開発し検証する。その際、支援プログラムによる保育者効力感及び保育者への役割期待の理解度の向上等を、統制群との比較による検討、及び保育者の個人差による効果の違いに注目して検討する。また、子育て支援に関わる保育者の専門性及び支援プログラムを介した保育者の力量形成の過程を提示する。

本論文全体は、4章構成である。第1章は、保護者が抱える育児不安と子育て支援に関わる国内外の先行研究の今日的な課題を示した上で、本論文の独創性を明らかにした。具体的には、育児不安と子育て支援に関わる学術的研究、及び実践的研究の展開を時系列に沿って整理・考察し、研究群の特徴等から区分を明示することを試み、育児不安研究に関わる2期(認知期、展開期)、及び子育て支援研究に関わる4期(萌芽期、模索期、展開期、評価期)を同定した。また、「保護者における保育者への役割期待に関する実証」「子育て支援に関わる保育者の専門性の可視化」「子育て支援に関わる保育者支援プログラムの開発」の3つの課題を提起した。本論文は、これらの課題解決を目指して、保護者と現職保育者への接近を試み、両者の整合性が高い保育者支援プログラムを開発し検証した点で、重要な意義を有することを説明した。

第2章は、保育者への役割期待の内容に着目し、その内容とは何かを、子育て支援との関連の中で明らかにすることを目的とした。第1節では、米国に在住すると共に、子どもに何らかの障害がある保護者の育児不安に関わる課題を示し、高い育児不安を抱える保護者の詳細な検討から、今後考え得る子育て支援の在り方について論考した。第2節では、質問紙法(因子分析、分散分析)を用い、保育者への役割期待の内容(「連携と個別支援」「家庭への援助・相談」「社会への発信・継承」)を明らかにした。第3節では、質問紙法(Ward法による階層的クラスタ分析)を用い、園(幼稚園及び保育所)に子どもを預ける保護者の特徴の類型化を試みた。保護者の典型的な5類型を同定できたことで、保育者への役割期待を捉え、保護者の特徴を明確にする1つの手立てを示した。

第3章は、現職保育者に焦点を当て、子育て支援を担う保育者への支援プログラムの開発と検証を試みた。第1節では、認知行動論的技法及びリフレクシオンに基づき、子育て支援を担う保育者支援プログラムを開発し、現職保育者への予備的調査により検討した。第2節では、対象となる現職保育者を増やし、支援プログラムを実施し、その効果を統制群との比較において検討し、支援プログラムが保育者効力感の向上に効果があることを明らかにした。第3節では、子育て支援に関わる保育者の特徴を、質問紙法(Ward法による階層的クラスタ分析)を用い、保育者の類型化を試みた。本支援プログラムにより、子育て支援に関わる保育者の力量形成が期待できることを実証すると共に、個人差にも言及した。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を基に、保育者の専門性と力量形成に関して考察を加え、研究の到達点、今後の課題及び展望を提示した。第1節では、高い育児不安を抱える保護者の現状と保育者への役割期待に関して、得られた知見を整理した。また、子育て支援に関わる保育者の専門性を可視化し、保育者の力量形成の土台となる「保育者と保護者の相互浸透行為モデル」を提案した。第2節では、「支援プログラムを介した保育者の力量形成の過程」及び「支援プログラムによる保育者効力感向上のメカニズム」について検討し、積み重ねた検証結果から、子育て支援強化のための支援プログラムの改善点を示した。第3節では、本研究の今後の課題を示した上で、展望を論じた。